文部科学大臣賞

『おにぎり』

個人応募（ドイツ在住）
小六　マイヤー　七海（ななみ）
（海外滞在年数十二年三カ月）

七月のボンは、夕方になると二回目の朝が来たみたいに空が明るくなってきれいだ。七月三日の夕方も青空。その時、私は自転車で私の学校、ギムナジウムに行く準備をしていた。私のクラスでは、毎年七月にクラス会がある。先生や生徒の家族が家から一つの料理を持って来て校庭に集まり、夜にバーベキューをする。十一ヵ国の生徒がいる私のクラスでは、色々な国の美味しい料理がテーブルにならぶ。私は友達にリクエストされたごま塩の「おにぎり」をお母さんに作ってもらった。

ドイツの学校では、長い休み時間に簡単なスナックを食べる習慣がある。そのために、お母さんは時々友達の分まで、おにぎりを作ってくれる。私のクラスの半分の生徒がお母さんのおにぎりのファンだ。私のたん生会では、お母さんが友達にスーパーのイタリア米を使って、簡単に電子レンジでお米をたく方法と、おにぎりの作り方を教えた。すると、早速自分でおにぎりを作ってくる友達が何人かいた。あまり上手ではないけれど、友達がおにぎりを作ってくると、私はうれしくなる。

「おにぎり、できたよ！」

私はお母さんがわたした紙ぶくろを、自転車の後ろのカゴに入れて、張り切って出かけた。友達が楽しみにしているお母さんのおにぎり。私は元気よく自転車のペダルをこいだ。夏の風は気持ちよくて、空が広く感じた。

家を出てから十分後、学校に着くと、友達のグレータとサラが、私の所にやって来た。グレータとサラはドイツの女の子。二人は自転車の紙ぶくろに気づくと、急にさけんだ。

「これ、おにぎりでしょう！」

二人がよろこんでいると、次々とおにぎりファンの友達やその家族が私の所に集まって来た。去年のクラス会でも人気だったお母さんのおにぎり。二十個でたりなかったので、今年は三十個作ったのに、テーブルにならべる前に全部無くなってしまった。丁度その時、おくれて来たお父さんとお母さんは、空っぽの紙ぶくろを見て、目を丸くして立っていた。

こうして、クラスの友達や家族までが、お母さんのおにぎりをよろこんでくれて、私は幸せ。でも、私は小学校とギムナジウムに入学した初めのころまでの四年半、おにぎりを一度も学校に持って行かなかった。それには訳があった。私は小学校に入学してすぐ、クラスで食べ物の話をした時、何人かの生徒にす司がきらいと言われて、いやな顔をされた。その時、私は悲しかった。なぜなら、す司は日本を代表する食べ物。そして、私のお母さんは日本人で、私はす司が大好きだったからだ。その日から、私は学校におにぎりや日本の食べ物は、絶対に持って行かないと決めた。そのことを知らないお母さんは、私に時々おにぎりを持たせようとした。でも、他の生徒と同じように、ドイツ

式のサンドイッチを作ってもらった。お母さんは、七海の大好きなおにぎりなのに、どうしたのと言ってこまっていた。私はお母さんに悪いと思ったれど、ここではお米を使った食べ物は、す司とかんちがいされる。だから、おにぎりをす司とまちがって、いやなことを言われたくなくて、ずっとおにぎりを学校に持って行けなかった。

　そんな私を変えるステキなハプニングが、私がギムナジウム、五年生の時に起こった。一月十三日、その日のお弁当に三角形の白い物が入っていた。いつもは茶色いパンが入っているはずなのに、私は目が点になった。

「えっ、どうして。お母さん……。」

　私は周りが気になってそわそわした。なぜなら、それはおにぎりだったからだ。私がしばらく食べるか、食べないかを考えていた時、

「七海、それなあに？」

　モロッコの女の子、サルマに気づかれた。

「おにぎりよ。お米でできた日本の食べ物。」

「わー、食べさせて！」

　すると、他の女の子達も集まって来て、おにぎりが食べたいと大さわぎになった。二個しかないおにぎりを八人で分けて食べた。食べている間、みんなが静かだったので、私は不安だった。でも、最後は美味しい、おかわりと言ってくれて、ほっとした。その時、私達を見ていた担任のボーシー先生が言った。

「七海は、日本人のお母さんがいて幸せね。」

　私は先生の言葉がとてもうれしかったけど、長い間おにぎりをいやがっていて、お母さんに悪いと思った。家に帰ると、お母さんは私に、「おどろかせてごめんね。」と言った。私はお母さんに、「ごめんねじゃないよ、よかったよ。美味しいおにぎりをありがとう！」と笑顔で答えると、お母さんは安心した。

　その日から、私は自信がついて、しばらくの間おにぎりを毎日学校に持って行った。すると、おにぎりを通して、今では楽しいことがいっぱい続いている。しょう来、私はお母さんのように日本のおにぎりの美味しさと素晴しさを、色んな人に伝えたいと思っている。